

伝えよう松ヶ崎の心

～松ヶ崎の郷土～



伝えよう松ヶ崎の心
～松ヶ崎の郷土～

発行年月 平成26年12月
編集・発行 松ヶ崎地区公民館
〒899-4632
鹿児島県垂水市牛根麓 1139 番地 9
☎0994-36-2882



平成26年12月
松ヶ崎地区公民館

1. 文化財と歴史

歴史の里、びわの里、桜島の降灰の里「松ヶ崎」の文化財と歴史を紹介します。西の牛根大橋から国道 220 号に沿って東の太崎観音へと解説します。前ページの松ヶ崎の簡単な地図とあわせてご覧ください。

○【造船所跡】…島津斉彬が幕府の禁を犯して対岸の桜島の瀬戸集落と共に日本初の西洋式軍艦を作った隠れ造船所跡。安政二年（1855）、万年丸と鳳瑞丸が造られ藩の御用船となりました。

○山手へ約 100m の岩崖に【磨崖仏】が彫られてあります。その昔、地主の女房殿の髪が抜け落ちて何かのたたりじゃないかと占い師に拝んで貰いました。すると、仏さんが埋まっているので掘り起こして供養するよういわれ、掘り起こして献花したところ女房殿の髪の毛が元通りに生えてきたという言い伝えがあります。



▲磨崖仏

○【陵】…陵とは天皇・皇后を葬った場所のことです。安徳天皇が漂着され、その後わずか 13 歳で亡くなられたので、ここに葬ったとする説もあります。



▲陵

○【笠仏首塚（六地藏）】…天正二年（1574）、入船城に立籠っていた肝付氏の支族である安楽備前守と島津義久の戦いで、戦死者の首が八百八竿につるされ、それを供養するために立てられた供養塔とされています。



▲笠仏首塚



▲安楽備前守の墓

○【見張り番所】…宮崎川から 50m 程度の駅よりの所にあり、また、近くには隠れ造船所への検問所もあり、その下の海岸が【射場下】と呼ばれていました。

○【入船城】…松ヶ崎城や牛根城とも呼ばれています。築城は不明ですが、南北朝の頃、牛根兵衛五郎道綱が居城し、その後池袋氏や本田薫親が居城としていました。後に、肝付兼続が安楽備前守に守らせましたが、島津氏に敗れ、島津の地頭が治めるようになりました。また、最初は源氏に敗れた平家の落人たちが山城を設け、源氏方の探索に備えたとする説もあります。

○【宮崎小路・中小路・東小路】…平家の落人たちが在りし日の京都を偲び、都大路を慕って姉小路、北小路等から採ったとされています。

○【御門の小路】は入船城への通りで来客やお殿様、重臣の方々をお出迎えする場所「むかえ」と呼び、国道からの入り口当たりの家を【御門】と呼びました。御門小路を上った突き当たりが、【華蔵院東光寺】とあり、入船城築城と同時代ごろに建立されました。御門の小路の突き当たりの左右の道を【馬場通り】といい、乗馬の訓練場所でもありました。

○【稲荷神社】…馬場通りを200～300m東へ行くと小高い所に、天正三年(1575) 島津方の伊集院魯笑齊久道が島津を誇示するために島津の氏神である稲荷神社を建立しました。同神社の鳥居は大正三年(1914)の大噴火により埋まり、【埋没鳥居】と呼ばれています。



▲埋没鳥居

○【飾磨】…平家の落人たちが姫路の塩田のある飾磨を偲んで付けた所と言い伝えがあります。

○【温泉場】…昔は河内の冷泉を引いて沸かし、村の人々が利用していました。

○【居世神社】…居世神社は欽明天皇の皇子とも、また一説には安徳天皇をお祀りしているとも伝えられる神社です。宇喜多秀家公が日参されたと伝えられています。

居世神社の東約200mの所に【小鳥神社】があり、ここで茶毘に付され、埋葬された所が【陵】であり、それより約300年後に居世神社が建立されました。神社の宝物は懸仏11面観音像です。また、宇喜多秀家公の奉納品、なぎなた・山なぎなた・盆・杯・木皿が奉納されましたが、現在は消失しています。



▲居世神社

○【河内の湯】…この冷泉は昔から切り傷やできもの等に良く効くと言われており、十数年前の水害で埋まってしまいましたが、最近その跡が少し見えてきました。

○【道の駅たるみず】…平成17年4月に開設された「湯つ足り館」は、日本最大級の足湯や温泉、旬の食材や鹿児島の特産品などが揃う物産館、レストランを併せた観光施設です。松ヶ崎のびわ等の販売も行われ、市外や県外の来館者も非常に多く、休日はたくさんの観光客で賑わっています。



▲道の駅たるみず

○【弁財天】…弁天様は七福神の1人で、言い伝えによると弁天様の前で躓けば片袖切って弁天様に捧げねばならないとされ、それは弁天様が片袖なしの着物を着ているからと伝えられています。



▲弁財天

○【口輪(クッパとも)】…平家は7を縁起として良く使いました。そのためこの部落は古くより7戸有って増減が無かった曲輪から来た言葉ではないかとされています。これは城に築いた石垣の囲いを指し、内側を内郭、外側を外郭といいます。ここは入船城からして外郭で近臣たちが陣をとって、来る人々を掎めた所です。

○【十三仏】…初七日から三十三回忌までの年忌に仏像を作って供養したものです。このように13体揃っているのは、市内でもこの1箇所のみです。



▲十三仏

○【七人塚】…安徳天皇を匿った平家の一門である平野家随一の剣客が、山伏に扮した源氏の追討使七人を討ち果たし、その霊を慰めるために建てたとされています。



▲宇喜多秀家公潜居跡

○【宇喜多秀家公潜居跡】…豊臣政権下の五大老、権中納言宇喜多秀家公が関ヶ原の敗戦の後、島津家を頼り、2年3ヶ月の間、この地に匿われました。

○【平野家】…宇喜多公を匿い、お世話をされた下屋敷です。

○【太崎観音】…慶長年間牛根地頭は輝北の平山古河守半助および半兵衛であり、古河守は牛根地頭時代に愛松山古河寺を観音先の山手、寺の原に建て、このとき輝北岳野の観音平からこの地へ観音を奉還したと伝えられています。



▲太崎観音

2. 松ヶ崎の昔

(1) 棒踊り

松ヶ崎地区には島津義久公の朝鮮出兵を記念して棒踊りが盛んに行われ、なぎなたと鎌とを持って踊る麓（宮崎小路、中小路、東小路）では、旧暦2月の最初の卯の日に行われました。

また、辺田（大中野、小中野、上ノ村）では、旧暦2月の最初の申の日に行われ、子どもたちは親戚や友人宅にお互いに誘い合い行き来し、ご馳走をいただいて大変楽しんだそうです。



▲棒踊りの様子



(2) 松ヶ崎の今昔



ほうあんでん
▲奉安殿前



▲旧小学校前



▲現在の松ヶ崎小学校



▲おねったん



▲もちつき大会

(3) 桜島大正噴火の話 (大山福熊氏 談)

桜島大正噴火で、わが郷土は、未曾有の大災害に見舞われ、当時住民等はひとまず山手の奥地へ避難したようだが、桜島や燃島方面からも避難者が殺到し、海岸線は一時混乱した模様であった。

その中に黒神から避難してきた親子(母36歳、娘4歳)が、地元民の後について坂道を登った。背中の娘がしきりに水をせがむので母は、降りしきる降砂、降灰の中を谷川に下り水を求めた。

その後、夕闇の迫るなか行き先を見失い孤立してしまった。この風説を聞いた地元有志が危険を顧みず探索にあたったが、娘は既に絶命し、母も間もなく他界したという。

この痛ましい遭難の記録が桜島大正噴火誌(本県発行)に残されているが、この悲話を知る古老はおらず、また遭難の地を記す碑石なども見当たらない。このままではこの母子の悲しい史実は語り継がれることもなく、年とともに永久に風化していくことは必定であろう。

桜島爆発から100年の今日、あの悲惨極まりない大惨事を後世に残していくために石碑建立などの施策は必要ではなかろうか。



▲桜島大正噴火の様子

3. 郷土料理

○のいのまかせ

・材料

米、里芋、さつまいも、大根、人参、
うのり（青のり）

・作り方

①米を洗いザルにあげる。

②里芋は一口大に切る。

③さつまいもは手のひらに乗せ、“こだくり（※16P参照）”水に浸してあくを取る。

④大根、人参は台湾おろし金（目のあらいおろし金）でおろす。

⑤野菜を大きめの鍋に入れ、一煮立ちさせてから米とダシを入れ、
具材に火が通ったら淡口醤油で味付けをした後、うのり（青のり）
を入れて混ぜ仕上げる。

・説明

当時は米が貴重だったため、里芋等の野菜で量を増やして食されていました。



○でこんソバ

・材料

ソバ粉、山芋、大根、干し椎茸、ねぎ、
つけ揚げ、煮干し

・作り方

①ソバ粉におろした山芋を混ぜ、こね
た後、均等に薄くのばして好みの幅
に切り、鍋で湯がき冷水で洗う。

②大根は台湾おろし金でおろし、鍋でさっと湯がいた後しぼり、出
来上がりのソバと混ぜる。

・説明

子どもの多かった時代に、大根をソバに見立て量を増やしていました。



○しったびら団子

・材料

さつまいも、小麦粉、団子の粉、黒砂糖

・作り方

①さつまいもは手のひらで“こだくり”
水に浸しあくを取る。

②鍋にさつまいもと少量の塩を入れ、
柔らかくなるまで湯がく。

③さつまいもが柔らかく煮えたら、湯切
りをした後つぶす。少量あん用にとっておく。

④つぶしたさつまいもに小麦粉、団子の粉を混ぜ小判形に形を作り、
沸騰したお湯で湯がく。

⑤(いもあんづくり)つぶしたさつまいもの中に黒砂糖を入れ、あ
んを作る。

⑥茹で上がった団子（だご）を適当に切り、いもあんであらめる。

・説明

しったびら（おしりのほっぺの形）にして作るさつまいもの団子です。



○かいもめし（いもごはん）

・材料

米、さつまいも

・作り方

①米を洗う。

②さつまいもは“こだくり”水に
さらした後、釜で米の上に乗せ
一緒に炊く。

・説明

松ヶ崎は田んぼが少なかったため、白米が少しにさつまいもを主食
としていました。



○いも田楽

・材料

里芋、豆腐、みそ、砂糖、みりん

・作り方

- ①里芋はよく洗い、熱湯の中に入れて湯がき、竹串が通ったら皮をむく。
- ②みそ、砂糖、みりんで練りみそを作り、つぶした豆腐・里芋・しょうがを入れて弱火でよくなじませる。
- ③皿に盛り付け、小みかんの皮、ネギをちらす。

・説明

松ヶ崎では豆腐や小みかんの皮が使われていました。



○こっば飯

・材料

米、さつまいも

・作り方

- ①さつまいもは、皮をむき薄くスライスして天日乾燥させる。
- ②乾燥したさつまいもを粉にして（昔は石臼で挽いていた）少量の水を加え、手のひらで包み指型を付けた団子にする。
- ③米が六分程度炊き上がったら上に乗せて仕上げる。

・説明

夏の保存食として食されていました。



○かつずし

・材料

大根、さつまいも、里芋、小麦粉

・作り方

- ①大根、里芋はいちょう切りにし、さつまいもは手のひらで“こだくり”、鍋で煮て食材に火が通ったら淡口醤油で味付けをする。
- ②中火にして耳たぶ位の固さになるまで少しずつ小麦粉を入れ混ぜ合わせる。

・説明

米が貴重だった昔に、米の代用食として食されていました。



○めんじゃん

・材料

小麦粉、砂糖

・作り方

鍋に小麦粉、砂糖を入れ、弱火で少しずつ水を入れながら、めっげ（おもどし）で“ういろう”位の固さになるまで混ぜ合わせる。

・説明

おやつに食されていました。



4. 地域の言い伝え・おもしろ言葉

○『ごつつくの かげごっ』

御器作りの欠け御器。御器とは茶碗皿のこと。茶碗作りの欠け茶碗。紺屋の白袴などと同じ意味です。

○『さっといしけていぬいのなっ』

申酉時化て、戌亥の風。今日明日は嵐でも、のちには穏やかな風の日和がやって来るという意味の言葉。

○『ななっどっからさっのあめはやまん』

七つ時から降り出した雨はやまぬ（七つ時は今の夕方4時～5時を指す）。反対語『あさがんないは、ひのかんぱっ』朝の雷は晴れて良い天気になる。

○『SOY SAUCE（ソイソース）の由来』

江戸時代の終わりごろ、薩摩藩は七十七万石を維持させるために不足分を密貿易で稼いでいました。

長崎の出島経由で密輸の品物、黒砂糖、沖縄の珊瑚木綿等々、その中に樽詰の醤油がありました。初めて見る外国人に、「このソースは何か」と尋ねられ、薩摩人は「そい」ですと答えました。「そい」というソース。それがソイソースの語源となり、ヨーロッパや英国へ伝わり、現在では世界中に広まり、薩摩言葉が唯一英語になったという説が残っています。

○『めにつぐわんそ』

明日会いましょう。中国語のさようなら「再見」と同じ意味かと思います。

○『たっちんこめ』

ぐずぐずせずですぐやる。太刀の来ぬ前にという意味。

○『もへというへ（木灰）はこやし（肥料）になるが、いまからというから（穀）は、み（実）にならん』

農作物の準備等は早めが良く、時期に遅れないように心がけることを表した言葉。

びしゃごだけ
○『鵜岳に雲がかかれば雨になる』

松ヶ崎の天気予報の言葉。

○『まっどっ』

地引網等を巻き上げる道具で、戦闘機も巻き上げて格納していました。

○『ひとかたっ、くわんかったぐらいでほっそほっそゆな』

一片餉喰わぬ程度で愚痴をいうな。昔は朝餉・夕餉一日二食で、昼はなかったため、午後には小腹が空くのでおやつを食べました。

男子たるもの一食抜いたくらいで愚痴言わぬ。

武士は喰ねど高揚技と合い通じる言葉と思います。

○『さだくろがきた』

夏の午後突然激しく短時間降る雨を指します。

○『あとんからっがさきひんなった』

後の鳥が先になる。後輩が先輩を追い越して立派な人になること。

○『山からもどいのかいもん皮なし』

お腹が空いたら何でも美味しくいただけるという意味です。

○『ひとけだにはふて、ふたけだにはちんけ、めばっめばっ』

一切れには大きく、二切れには小さい、めばるといふ魚は。帯に短したすきに長しと同じく、中途半端を言い表すときに使います。

○『万年暦（まんにょんごよん）』

昔ながらの古式ゆかしい暦にはその日の吉凶、神事、祭事、四季折々の出来事、農作業の時期、月の満ち欠け、潮の満ち引き、人生の教訓、ことわざ等々、あらゆる事柄が記入されていました。

松ヶ崎では、知識が豊富で、何事につけ物知りで、沢山の知恵が頭の中に詰め込まれている人を言います。

○『ぜんといやんめしんやんめ』

銭取病は、死ぬ病。お金を稼ぐ事は死ぬ程つらく、苦しいものであることを言います。

○『満艦飯（まんかんめし）』

赤飯。軍艦がお祝いのしるしに、手旗信号の旗や国旗等をにぎにぎしく飾り立てる事を満艦飾（マンカンシク）と言ひ、晴れのお祝いの御膳に賑やかな満艦飯を盛り付けて、神様にお供えをしました。

新造船の進水式には、青い竹竿に、満艦飾に飾り立て、今でもお祝いをしています。

明治時代、横須賀の日本海軍軍楽隊に、垂水出身の瀬戸口藤吉という人がいて、世界の最たる行進曲「軍艦マーチ」を作曲しました。

○『ちんちんままに、ぶのすい』

白米の御飯にお魚の汁。昔、お米は貴重品で白米だけの御飯はめったに食べられません。普段はさつまいもを混ぜたり、押麦粟、稗等々を入れて炊いていました。

晴れの祝いの日は何一つ混ぜない白米だけの御飯（銀シャリ）が一番上等、最高の御馳走でした。

○『おかべ』

宮中言葉で豆腐の意味。

○『ずし』

おじやのこと。

○『うあせ、こあせ』

大汗、小汗。

○『さぐいちけがならん』

探し出すことができない。

○『ひえくいあがった』

凍えるような寒さのこと。

○『しょけ』

ザルのこと。

○『ぎったまい』

ゴムマリのこと。

○『たたっぱね』

工事などで板を叩いてから離すこと。

反対語『うったちけ』。

○『こだくる』

手のひらで大きなものを包丁を使って小さく砕くこと。



・参考、引用文献
『落日後の平家』永井彦熊著
『垂水史料集（八）』垂水市教育委員会
・監修
下世吉美、村山大海